

清水ヶ丘の風

ハルモニーコール楽事通信第35号

2017年9月9日

マタイ受難曲 各論-7 (第22, 23, 24, 25, 26, 27 曲)

第22曲 レチタティーヴォ・アコンパニャート「救い主は御父の前にひれ伏せられる」(バス、弦楽器、通奏低音 4/4拍子、ニ短調、a tempo(テンポを守って))

(第34号から続く) テキストが語るのは「救い主が御父の前にひれ伏すことで、主は全ての人間を墮落の淵から再び神の恵みへと高めてくださる。そして覚悟を決めた主は、神の御心にかなうよう、世の罪を注がれた苦い杯(十字架刑)を飲もうとする」という内容で、弦楽器の動きは音画によりこのテキストを描写しています。

第23曲 アリア「喜んで私も覚悟しよう」(バス、ヴァイオリン1+2、通奏低音 3/8拍子、ト短調)

自由詩による初めてのバスアリア、トリオで演奏されます。バスは信者の立場から「イエスに倣って自分も苦い杯を受け容れよう」と歌います。歌詞の内容に応じてバスとヴァイオリンは総じて低い音域で進行し、覚悟のほどを示す決然としたリズムが特徴的です。中間部「主の口が杯を甘くしてくださった」で音楽はト長調に転じて、しばしの明るさを見せて変ホ長調に終止し、ダ・カーポの指示で前奏に戻ります。

このアリアは演奏時間の割には長く感じられ、今ひとつ聴き手の心を打つものに欠けるような気がしますが、いかがでしょうか。

これに対して全曲中最も長大なアリアである第39曲「憐れんでください、私の神よ」はダ・カーポしません。中間部が終わるとわずか1小節の間奏を挟んで再び冒頭の歌詞が歌われますが、その音型は冒頭部分に比べて切り詰められており、繰り返し感を避けています。後奏もソロヴァイオリンの魅力が聴衆を飽きさせません。マタイきっての名アリアと比べると酷ですが、この第23曲はダ・カーポした後の前奏で曲を終えてもいいのではないかとさえ思ってしまう。もちろんダ・カーポアリアはバッハの指示通りダ・カーポすべし、という意見もあります。例えば礒山雅は「ダ・カーポアリアの均整を実現せずにバッハのアリアは完結しない」と述べています(「マタイ受難曲」p178)が、その根拠は必ずしも筆者を納得させるものではありません。

第24曲 レチタティーヴォ(エヴァンゲリスト、イエス)

イエスは弟子たちの所に戻りますが、弟子たちは眠りこけています。イエスは彼らを叱責し、再び神に祈ります。「父よ、私が飲まない限りこの杯が去らないのでしたら、あなたの御心のままに」

第25曲 コラール「御心は常に果たされますように」(4声合唱 フルート1, 2、オーボエ1, 2、弦楽器、通奏低音 ニ長調)

プロイセン(現在のドイツ北東部)公アルブレヒト作詞のコラールが歌われます。受難を受け入れるイエスの覚悟を受けて、活気と希望に満ちた和声(礒山雅)がつけられています。

第26曲 レチタティーヴォ: イエスの捕縛(エヴァンゲリスト、イエス、ユダ)

物語は第一部最大の山場を迎えます。イエスは再び弟子たちの所に戻りますが、弟子たちはまたしても眠りに落ちています。イエスはそのを離れ、同じ言葉で三たび祈ってから弟子たちを起こして告げます「見よ、

時が来た、人の子は罪人の手に渡されるのだ」。見れば裏切り者のユダが、剣と棒を持った群衆の先頭に立ってやってきます。そしてかねて打ち合わせの通りイエスに近寄り接吻します。イエスは「友よ、おまえは何故来たのだ？」と問いますが答えはありません。そしてそれを合図に群衆がイエスを捕えます。

この曲は第一部の聖句を扱った曲中で、第11曲「最後の晚餐」の場面に次ぐ長さ(35小節)を持ち、エヴァンゲリスト、イエス、ユダの三者により緊迫した光景を描き出します。

第27曲 アリアと合唱「こうして私のイエスは捕らえられた」(ソプラノ、アルト、4声合唱 アンダンテ、4/4拍子、ホ短調→4声-8声合唱 ヴィヴァーチェ、3/8拍子、ロ短調 フルート1、2、オーボエ1、2、弦楽器、通奏低音)

曲の前半は模倣する木管楽器(フルート+オーボエ)2と1に導かれ、ソプラノとアルトが切々と訴える二重唱カノン。ソロの伴奏(アンサンブルⅠが担当)譜には通奏低音がありません。弦楽器は不安をかき立てるようなユニゾン。チェロはヴィオラパート(ヴァイオリンとオクターブのユニゾン)を演奏します。通奏低音を欠くのは、やがて第二部に出てくるソプラノのアリア「愛するがゆえに救い主は死のうとなさる」同様、悲しみと不安で身の置き所、心の落ち着きどころがない有様を表しています。しかしイエスの捕縛をただ見守り、嘆くしかない二重唱の合間に、群衆の仕業(しわざ)を咎める合唱がアンサンブルⅡを伴って「Laßt ihn, haltet, bindet nicht! あの方を放せ、待て、縛るな!」と鋭く3回、割って入ります。この場面は後で出てくる「Sind Blitze, Sind Donner 稲妻と雷鳴は」の歌詞を先取りしたような爆発的表現で、Laßt ihn と haltet の間の4分休符はまるで稲妻が光って雷鳴がとどろくまでの一瞬の静寂を描写しているかのようです。しかしこれは反抗的な拒絶ではあってもイエスの捕縛に対しては無力な叫びです(この間の緊張を持ちこたえることができずに前のめりになってしまう合唱を時々見かけますが、これではバッハが技巧を凝らした音画が台無しになってしまいます。Laßt ihn のあと、ぐっとこらえて休符を二つカウントしてから haltet を歌いましょう)。

本来の譜割りはソロがⅠ、合唱はⅡとなっていますが、今度の「マタイ」公演ではソロはⅠとⅡを兼任し、合唱も二重合唱以外はⅠとⅡが共同して歌うことにしていますので、この小論の記述もⅠとⅡはアンサンブル(器楽)パートのみ指定しました。

ソロの二重唱がアンダンテで「月も光も悲しみで沈んだ」とひたすら嘆き悲しみ「彼らはイエスを引いてゆく、あの方は縛られている」と歌い終わるや否や、突如として拍子とテンポは3/8、ヴィヴァーチェのフガート(小さなフーガ)となり、合唱が歌い出します。ここでも「Blitze 稲妻」「Donner 雷鳴」は、一拍のずれを伴って合唱ⅠとⅡが残像と反響のように歌い交わします。いわゆるアンティフォーナ(交唱)ですね。

そして104小節。背筋が凍りつくようなゲネラルパウゼ(総休止、「これもおそらく稲妻と雷鳴の間の静寂?(ブルジョワ)」)の後、堰を切ったようにあふれ出す器楽の16分音符に導かれた後半の合唱は、怒りに震えて「地獄よ、炎の深淵を開け、裏切り者、人殺しの血を打ち砕け、滅ぼせ、飲み尽くせ」と呪いの言葉を吐き散らします。これは聖書のテキストにはない暴力的な群衆シーンで(合唱Ⅰの127, 8小節で「Wut 激怒」に与えられた女声のロングトーンと男声のトレモロをご覧ください)、筆者が参照したCD(M.コルボ指揮、ERATO 292-46375-2 輸入盤)の解説(J. L. ブルジョワ著、J. アンダーウッド英訳)は「怒り、叫び、拒絶、爆発、憎悪、復讐」などありとあらゆる激しい言葉を羅列し、この曲の激しい感情表出を描き出しています。そこでも述べられているように第27曲は自由詩による音楽であり、歌う主体は全く立場を逆にしますが、第二部に現れる聖書の言葉による群衆合唱に似た、手をつけられないほどの熱狂をはらむ、真に鬼気迫る音楽です。

【後記】4月に始まった「マタイ受難曲」各論もようやく第一部の終曲に近づいてきました。ここまでにかかった時間は5ヶ月、ページ数で全曲の1/3強ですからまだまだ先は長いと感じます。もう少しピッチを上げないと、終わりまで行かないうちに本番を迎えてしまうのではないかと、少し焦っているところです。(新井)